

2026 年 08 月 25 日（火）【外為 L a b】松田哲

タイトル：【夏休み明け】

今年（2026 年）の「夏休み相場」は、7 月末に実施された日米の協調介入が、最大のニュースだった、と考えます。

振り返ると、今年の夏は、概して「穏やかな相場」であった、と考えます。

+++++

そして、先週のコラムでも強調しましたが、今週は、「ジャクソンホール会議」が控えています。

「ジャクソンホール会議」とは、米国のカンザスシティ連邦準備銀行が、ワイオミング州のジャクソンホールで、毎年夏に開く金融・経済シンポジウムのこと。

過去の例では、2010 年 8 月に、当時のバーナンキ FRB 議長が、量的金融緩和第 2 弾（QE2）に踏み切ることを示唆する講演を行い、金融市場に大きく影響を与えた。

今年（2026 年）の「ジャクソンホール会議」は、今週の 8 月 27～29 日に予定されている。

「ジャクソンホール会議」で、今年の 9 月以降の FRB の姿勢が明らかになる可能性も否定できないので、大いに注目している。

+++++

さて、夏休み明けの外国為替市場は、どうなるのであろうか？

ドル／円を考察すると、引き続き、上昇傾向（ドル高円安傾向）にある、と考えます。

ドル／円を上昇トレンドにする要因の中で、現時点で、最も影響のあるものは、日銀の金融政策だ、と考えます。

言い換えれば、日米の金利差がドル／円を上昇トレンドに導いている、と考えます。

日銀の政策金利が 1% であるのに対して、米国の政策金利は 3.5－3.75% である。

金利差で言えば、2.5% 以上の開きがある。

日銀は今後、政策金利を引き上げる行動に出る、と考えるが、マーケット（金融市場）の想定している範囲内での利上げであるならば、いわゆる「織り込み済み」の反応に終わり、ドル／円の上昇トレンドに変化が無い可能性も否定できない、と考えます。

換言すれば、マーケット（金融市場）が要求している日銀の利上げは、もっとスピード感があり、かつ、その利上げ幅も従来の 0.25%ではなく、それ以上の利上げ幅を望んでいるのだ、と考えます。

仮に、次回（2026 年 9 月）の日銀金融政策決定会合で、利上げが実施されるとしても、従来の 0.25%の利上げならば、大局での流れは変わらない、すなわち、時間が経過すれば、ドル／円の上昇トレンドに変化が無いのだろう、と考えます。

+++++

（2026 年 08 月 25 日東京時間 15：00 記述）